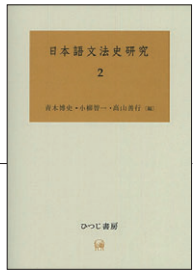
国立国語研究所学術情報リポジトリ

〈著書紹介〉 青木博史,小柳智一,高山善行編『日本語文法史研究2』

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2015-10-30
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 青木, 博史
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00000800

〈著書紹介〉

青木博史，小柳智一，高山善行 編
『日本語文法史研究 2』
2014 年 10 月　ひつじ書房　A5 判　288 ページ　3,200 円＋税



青木 博史

1. 論文集『日本語文法史研究』刊行の趣旨

本書は，本邦初を謳った，日本語文法の歴史的研究をテーマとした定期刊行の論文集，『日本語文法史研究』の第 2 号である。隔年刊行を予定しており，最新の成果を発信し続けていくことが，基本的かつ最大の目標である。本論文集は，国立国語研究所共同研究プロジェクト「日本語文法の歴史的研究」（独創・発展型，2010 年 11 月～2013 年 10 月，プロジェクトリーダー：青木博史）による研究成果の一部を含んでいる。

『日本語文法史研究』には，研究情報に関する企画もいくつか盛り込まれている。まずは，「テーマ解説」。これは，日本語文法史における特定の研究テーマについて，そのテーマに精通している研究者が，これまでの研究の成果と今後の展望をわかりやすく解説するものである。専門外の読者に対してのチュートリアル的な役割を持つことを意図しているが，専門家が読んでも十分役に立つものとなるはずである。次に「文法史の名著」。これは，この分野で「名著」とされる基本的な文献を取り上げ，内容の紹介とともに，今日的な目から見た「書評」を行うものである。新刊の書籍に対する書評は学会誌等で行われるということもあり，刊行からいくらか時間が経ったものを中心に取り上げるところに，この企画の狙いがある。基本文献を読み直すことで，現在的な価値を見出すことができるものと思う。

さらに，巻末に「文法史関係研究文献目録」を付す。これは，直近の 2 年間（創刊号のみ 3 年間）における日本語文法史に関して書かれた著書・論文を，一覧の形で示すものである。国立国語研究所「日本語研究・日本語教育文献データベース」に基づいて作成しており，当該分野の大まかな研究動向などが見てとれるように思う。

2.『日本語文法史研究 2』の構成と内容

本書の構成は，第 1 号を継承し，研究論文 10 編に加え，「テーマ解説」2 編，「文法史の名著」1 編，そして研究文献目録，という形になっている。研究論文の配列は，主に考察の対象とする時代順に並べている。以下，各論文の内容について簡単に紹介する。

日本語と中国語の対照研究の成果を活かし，上代語のアスペクトを新しい観点から捉え直した**竹内史郎「事象の形と上代語アスペクト」**，山田文法の複語尾の分類を再検討し，問題点を指摘するとともに継承発展を図った**仁科明「「属性」と「統覚」とそのあいだ」**，「公尊敬」と「一般尊敬」のそれぞれの用法を明確に規定し，そのうえで両者の関係を歴史的観点から

整理した**吉田永弘「いわゆる「公尊敬」について」**，疑問文における歴史変化の大まかな方向性を示し，そこから古代語の疑問標識の分布を説明した**衣畑智秀「日本語疑問文の歴史変化」**，準体助詞の歴史と格構文の構造変化をふまえ，接続助詞「のに」の史的展開を記述した**青木博史「接続助詞「のに」の成立をめぐって」**，「これ」「それ」における指示詞から感動詞への変化のプロセスについて，通時的な観点から説明を与えた**深津周太「動作を促す感動詞「ソレ／ソレソレ」の成立について」**，副詞「どうも」の用法の変化について，文法変化の一般性を視野に入れながら丁寧に記述した**川瀬卓「近世における副詞「どうも」の展開」**，従来の文法史研究では扱いにくかった行為指示表現について，地域差も視野に入れながら歴史的変遷を描いた**森勇太「行為指示表現としての否定疑問形の歴史」**，現代語との対照という観点から，近世後期江戸語の「はずだ」の特徴を浮かび上がらせた**岡部嘉幸「近世江戸語のハズダに関する一考察」**，「主観」という用語について，本来の哲学用語に立ち帰って言語事実に照らしながら理論的妥当性を検証し，自身の規定を示した**小柳智一「「主観」という用語」**，以上 10 編である。

「**テーマ解説**」は，福沢将樹氏「アスペクト」と，矢島正浩氏「条件表現」の 2 編。ともに単なる「解説」の域を超えており，初学者から専門的な研究者まで興味を持って読んでもらえる上質の読み物となっている。「**文法史の名著**」は，西田隆政氏による，浜田敦・井手至・塚原鉄雄著『国語副詞の史的研究』。1950 年代に行われていた共同研究の意義，そして副詞の歴史的研究の重要性を再認識させられる。そして，巻末の「**日本語文法史研究文献目録**」には，2012 年から 2013 年の 2 年間にわたる関係論文・著書を掲載した。

3. 今後の展望

『日本語文法史研究』は，毎号，若手研究者による論文数本を掲載し，当該分野の活性化を図ることを目指している。今号は，そうした気鋭の若手を中堅が迎え撃つという構図になっている。本書中で展開される，そのような熱気を感じていただけたら幸いである。

現在，本論文集は審査制は採っておらず，編者からのコメントに基づいて必要に応じて改稿するといったシステムを採っている。今後，オープンに投稿を募るシステムにすることも視野に入れ，「小特集」や「展望」などの新しい企画をも盛り込んでいきたいと思っている。『日本語文法史研究』が，これからの文法史研究と共に歩み続け，その発展に貢献し続けていくものとなるよう努力していきたい。

青木 博史（あおき・ひろふみ）

九州大学大学院人文科学研究院准教授。博士（文学）（九州大学）。京都府立大学文学部講師，同助教授・准教授を経て，2009 年 4 月より現職。2010 年 4 月より 2015 年 3 月まで国立国語研究所時空間変異研究系客員准教授。

主な著書・論文：『語形成から見た日本語文法史』（ひつじ書房，2010），『日本語の構造変化と文法化』（編著，ひつじ書房，2007），『ガイドブック日本語文法史』（共編著，ひつじ書房，2010），『日本語文法の歴史と変化』（編著，くろしお出版，2011），『日本語文法史研究 1』（共編著，ひつじ書房，2012）.

社会活動：日本語学会評議員，日本言語学会評議員・大会運営委員長，日本語文法学会評議員・学会誌委員，訓点語学会委員，西日本国語国文学会常任委員・編集委員長.